

第4章

Chapter 4

パラリンピック



パラリンピック成功は 神奈川県の違い

「パラリンピックの成功なくして、東京2020大会の成功はない」
その思いを具現化するために様々な取組を始めた

パラリンピックの成功なくして 東京2020大会の成功はない

2013年1月7日、招致委員会は、14項目から成る立候補ファイルをIOC本部へ提出した。

その中では、パラリンピックの意義について、「東京2020が提案するコンセプトの全体像は、全てのひとを差別なく社会に取り込み、障害者のニーズと興味に思いをはせることで、より良い世界を築き、社会全体により明るい未来をもたらすことができる、というメッセージをパラリンピック競技大会を通じて示すことである」と記載されている。

そして、多くの人が「パラリンピックの成功なくして、東京2020大会の成功はない」と語るようになり、その具現化に向けた様々な取組が始まった。本県でも、2014年8月に策定した「神奈川ビジョン」(p.32参照)で、パラリンピックの振興を取組の柱の一つとしている。

また、県では2016年7月26日に障害者支援施設である県立「津久井やまゆり園」において、多くの尊い命が失われるという大変痛ましい事件が発生した。県は、これまでも「ともに生きる社会かながわ」の実現をめざして取り組んでいたところだが、このような事件が発生したことは、大きな悲しみであり、強い怒りを感じるものであった。このような事件が二度と繰り返されないよう、この悲しみを力に断固とした決意をもって、ともに生きる社会の実現をめざし、県と県議会が共同して2016年10月14日に「ともに生きる社会かながわ憲章」を策定した。

「誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会を実現する」、「障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除する」といった憲章の理念の実現をめざし取組を進めている県にとって、パラリンピックの成功は大きなレガシーになると考えていた。

力強い泳ぎで、3つのメダルを獲得した富田宇宙選手



YUTAKA/アフロスポーツ

第2節

かながわパラスポーツ推進宣言

パラリンピアンから学ぶことを前面に打ち出した
「かながわパラスポーツ推進宣言」により、数多くの実践的な事業を行った

「かながわパラスポーツ」で パラリンピックを盛り上げる

パラリンピックをどのようにして盛り上げていけばよいか、県では模索する日々が続いた。そうした折、2014年夏に、パラスポーツを広めることを通じて共生社会をめざす活動を行っている(特非)STANDの代表理事で、組織委員会の顧問を務めた

伊藤数子氏から、次のような提案を頂いた。すなわち、「パラリンピアンは残された機能を最大限に生かす工夫をしているが、こうしたノウハウは、例えば年齢を重ねて身体機能が衰えてきた高齢者にも生かせるのではないか」ということであった。これをきっかけとして誕生した県独自のパラリンピックを盛り上げる取組が、2015年1月6日に発表した「かながわパラスポーツ推進宣言」である。

～パラリンピアンから学ぼう!～「かながわパラスポーツ推進宣言」

世界の舞台で活躍するパラリンピアンは、自分の運動機能を限界まで鍛えて、最大限の力を発揮できるよう創意工夫し、動く部分をもっと動かせるように努力しています。

誰しも、高齢者になれば、どこかの身体機能が衰えていきますので、自分の機能を使ってスポーツをしているパラリンピアンから学ぶノウハウはたくさんあります。

みんながパラリンピアンから学び、年齢、障がいなどによって異なる一人ひとりの運動機能を活かして、すべての人がスポーツをすること、それを観ること、支えることは、とても大切なことです。

それは心身をより健康な状態に近づけ、「未病を改善する」ことにもつながります。

そこで、神奈川県ではパラスポーツを「障がいのある人がするスポーツ」という考え方から一歩進め、「すべての人が自分の運動機能を活かして同じように楽しみながらスポーツをする、観る、支えること＝『かながわパラスポーツ』」と捉え、3つの取組を推進します。

1 パラリンピアンから学びます

パラリンピアンが自身の運動機能の限界に挑む姿から、体を動かすノウハウや創意工夫、諦めない心、できるようになる喜びを学びます。

2 「かながわパラスポーツ」を実践します

年齢、障がいなどを越えてスポーツをする喜びや、仲間ができる楽しみを実感できるよう「かながわパラスポーツ」を実践します。

3 パラリンピック競技大会を盛り上げます

「かながわパラスポーツ」を実践することで、2020年に東京で開催されるパラリンピック競技大会を神奈川から盛り上げていきます。

2015年1月6日 神奈川県知事 黒岩 祐治

かながわパラスポーツの普及に向けて

「かながわパラスポーツ推進宣言」を受けて動き出した実践的な取組は、パラアスリートをサポートするボランティアの養成、パラスポーツの普及を図る人材の育成、そしてパラスポーツイベントの実施などである。

かながわパラスポーツの普及に向けては、いくつかの課題があった。まず、障がいのある方への理解を広げること、また、パラスポーツを実践するに当たり、障がいのある方々をサポートする人材を育てる必要もあった。さらに、パラスポーツの発展のためには、障がいについての基礎知識を備えた指導者の育成も課題となっていた。こうした課題の解決に向けて様々な取組を行った。

2016年から始めた「神奈川県障害者スポーツサポーター養成講習会」では、県内のパラスポーツイベントなどにおいて、ボランティアとして活動するスタッフの養成を目的として、障がいのある方への理解を深め、介助方法を体験するなどの講習を行っており、初年度以降、年4～5回開催し、これまでに480人のスタッフを養成している。

同じく2016年から、パラスポーツの普及推進に向けて、地域の活動の核となる人材を養成するため「かながわパラスポーツコーディネーター養成会」をスタートした。養成会では、座学とスポーツの体験を通して、地域での持続的な活動を行うための方法を学ぶ。会場は県内の養護学校や特別支援学校などで、新型コロナウイルス感染症の感染が拡大する2020年までに13回養成会を実施し、291人のコーディネーターを養成してきた。

このほか、(公財)日本パラスポーツ協会の認定を受け、障がいのある方の適性に応じたスポーツの指導者及び障がいについて基本的な知識を身に付け、指導できる人材を養成する「神奈川県初級障がい者スポーツ指導者養成講習会」を実施している。本講習会の修了者は(公財)日本パラスポーツ協会の「初級障がい者スポーツ指導員」に登録され、2022年1月31日現在、県内では、1,425人が登録されている。

こうした人材の育成のほかに、パラスポーツをより多くの地域で体験してもらい、地域に根ざしたものとするために、用具の貸出事業も行っている。対

象は、市町村、学校、地域のスポーツ関係団体などで、ボッチャ、フライングディスク、ブラインドサッカー、ゴールボールの用具を貸し出している。

様々な学びのある かながわパラスポーツフェスタ

「かながわパラスポーツ」の考えを実践し、宣言にもものとした取組として始めたのが、「かながわパラスポーツフェスタ」である。

フェスタでは、宣言にもある「パラリンピアンから学ぶ場」として、パラリンピアンによるトークショーを、また「実践の場」として、様々なパラスポーツの体験会を行っている。例えば、2015年5月に開催した、1回目のフェスタの内容は次のとおりであった。

まず、パラリンピアン(射撃)の田口亜希氏による講演会を「車いすの生活からパラリンピックへ」というテーマで行い、引き続き、田口氏、元フィギュアスケート選手の浅田舞氏、(特非)STAND代表理事の伊藤数子氏、黒岩知事によるトークショーを行った。パラリンピアンがパラスポーツとの出会いによってどのように変わったのかといった体験談を紹介することで、多くの方にとっての学びの機会となった。

また、かながわパラスポーツの実践の場としては、アイマスクを着けてブラインドサッカーの実戦練習を行ったり、ボッチャや車いすバスケットボールの競技体験を行った。競技の面白さだけでなく、競技ごとに工夫されたルールに直に触れることで、見ていだけではなかなか気付くことのできない障がいのある方の苦勞を知り、共生社会に向けた気付きを得る機会にもなった。

実際にフェスタに参加した方からは、「ボッチャはハマります。面白いです。頭を使わなければいけないし、よく考えられたスポーツだと思いますね」といった感想も寄せられた。参加者は約350人であった。

2015年から始まったこのフェスタは、新型コロナウイルス感染症の感染が拡大する以前の2019年まで毎年行い、これまでに計12回、参加者は約9,500人となっている。

かながわパラスポーツフェスタの一環として、2018年と2019年には「かながわボッチャ」を開催し

た。これは競技を継続する意欲を高め、誰もが参加できて多くの人と交流できる大会として実施したものの。予選リーグから決勝リーグまで白熱した戦いが繰り広げられた。

このほか、2019年には由比ガ浜で「かながわパラスポーツビーチフェスタ2019」が開催され、ビーチマットを敷き、車いすを利用している方なども参加できるビーチスポーツの体験プログラムを実施した。海に入ることができる車いすでの海水浴やボディボードを使った波乗り体験のほか、トークショー、障がいのある方々も含めたパフォーマンスも披露された。

2019年8月17日には、横浜赤レンガ倉庫イベント広場でパラリンピック1年前を記念してパラリンピックをテーマにしたイベントを開催(横浜市と共催)。車いすラグビー元日本代表三阪洋行氏や黒岩知事らが出演したトークショーでは、知事が三阪氏のタックルを実際に体験。タックルの衝撃は、車いす同士の衝突音が会場全体に響きわたるほどに激しいものであった。また、このトークショーにも出演いただいた、リオ2016パラリンピック閉会式のセレモニーでダンスを演じた義足ダンサー大前光市氏には、圧巻のダンスパフォーマンスを披露いただいた。さらに、ダウン症の書家で比類なきエネルギーあふれる作品群を次々と発表している金澤翔子氏には、「飛翔」の揮毫パフォーマンスを披露いただいた。なお、このとき書いていただいた「飛翔」は、パラスポーツの推進拠点である県立スポーツセンターに展示している。

このほかにも、走高跳でシドニー2000パラリンピックから5大会連続入賞の鈴木徹氏による迫力のデモンストレーション、射撃で3大会連続でパラリンピックに出場され、組織委員会アスリート委員の田口亜希氏からの出場選手たちへのエール、タレントの高橋みなみ氏らのトークショーを実施した。さらに、体操競技の金メダリストの森末慎二氏、女子バレーボール元日本代表の益子直美氏らによるJ:COMチャンネル番組の公開収録、5人制サッカー(ブラインドサッカー)元日本代表の^{よしはら}葭原滋男氏、サッカー元なでしこジャパンの丸山桂里奈氏らによるトークショーなどを実施した。一方、会場ではパラリンピック体験コーナーとして、義足での陸上競技、車いすラグビー、車いすバスケットボール、5人制

サッカー(ブラインドサッカー)の競技体験を実施した。

横浜赤レンガ倉庫という人が集まりやすい場所での開催に加え、多彩なゲストや盛りだくさんのプログラムを実施したことで、約2万人もの方に来場いただいた。

パラアスリートの育成と 条例による普及へ

2016年からは「神奈川県パラリンピアン育成事業」も始めた。東京2020大会に県にゆかりのある選手が一人でも多く出場することをめざして、パラアスリートの活動費を補助する事業であり、2020年からは「神奈川県障がい者アスリート支援事業」として継続している。これまで6年度にわたる補助事業を行い、延べ199人のアスリートに補助を行った。補助対象となったアスリートの中で、東京2020大会に24人が出場し、メダルを獲得した選手は6人であった。

さらに神奈川県育ちの次世代のパラリンピアンをめざすために、オリンピックやパラリンピックの代表選手や指導者による指導の下、障がいのある方を対象としたイベント「パラスポーツトライアル in かながわ」を2016年度から2019年度まで実施し、様々な種目のパラスポーツに挑戦していただいた。これまでに8回実施し、836人が参加している。

こうした県の取組に共感した市町、大学等からは、パラスポーツフェスタなどへの共催の申出や市町等が独自に実施する催しへの参加依頼など、地域への広がりも見えている。

また、県では2017年3月に、東京2020大会などの大きなスポーツ大会開催を契機として、県全体で確実にスポーツの推進を図り、超高齢社会を迎える中、誰もが生涯にわたりスポーツを楽しみ、いつまでも健康で幸福であると感じられるいのち輝く地域社会を実現していくため、「神奈川県スポーツ推進条例」を制定した。条例第6条には、「かながわパラスポーツの普及」として「県は、かながわパラスポーツ(県民がそれぞれの関心、目的、体力、年齢、運動機能及び健康状態に応じて、生涯にわたり楽しみながらスポーツを行い、観覧し、及び支えることをいう。以下同じ。)に関する行事の実施その他かながわ



1



2



3



4

□2015年5月30日に開催した「かながわパラスポーツフェスタ」の様子 ②横浜赤レンガ倉庫で開催したパラリンピック1年前イベントの様子 ③パラリンピック1年前イベントでは、書家の金澤翔子氏(左端)に揮毫していただいた ④バリアフリー化のために由比ガ浜の砂浜に敷かれたビーチマット。マットをつなぐ部分には「ともに生きる社会かながわ憲章」のロゴをあしらった

パラスポーツの普及に関し必要な施策を講ずるものとする」とうたっている。条例に明記されたこと、すなわちオール神奈川の意思として、かながわパラスポーツが位置付けられたことは、県における東京2020大会の大きなレガシーの一つである。

さらに、これまで県内には、障がい者スポーツ競

技団体が行う競技活動の情報の集約や活動支援の中心となる団体がなかったことから、その中心となる団体の設立の検討が2017年度から開始された。その後、検討会や設立準備会での検討を経て、2020年3月、(一社)神奈川県障がい者スポーツ協会が設立された。

第3節

ポルトガルパラリンピックチームの
事前キャンプを通じて

ポルトガルパラリンピックチームの事前キャンプは貴重な経験。
コロナ禍でやり残したこともあった

使命を帯びた ポルトガルチーム

県は2019年9月9日、藤沢市とともにポルトガルパラリンピック委員会と事前キャンプに関する協定を締結した(p.82参照)。

協定締結式に出席したポルトガルパラリンピック委員会のレイラ・マルケス・モッタ選手団長は、元パラ水泳の選手で、1996年のアトランタ大会から4大会連続出場したパラリンピアン。レイラ選手団長

は、事前キャンプ終了後にも、お礼のメッセージ動画を送ってくれた。

ポルトガルのパラリンピックチームは、レイラ選手団長をはじめ、選手団の方々がパラリンピックの理念である共生社会の実現に向けて強い使命感を持って接してくれた。

パラアスリートを応援する県の事業に対して、ポルトガル大使館を通じてポルトガルパラリンピック委員会から、アスリートたちの練習風景の映像やインタビューのほか、選手紹介の動画も提供され、



県立スポーツセンターで練習するエルデル・メストレ選手。陸上競技男子100m T51、200m T51に出場し、入賞(それぞれ7位、6位)を果たした

2021年3月、「かなチャンTV」で公開した。

事前キャンプには、選手30人、コーチ・スタッフ39人の計69人が参加。ポルトガルチームは何事においても協力的な姿勢を示していただけただけから、練習見学や地域住民との交流などを通じたパラリンピック・パラスポーツへの理解や盛り上がり、共生社会実現のさらなる推進に向けた大きなきっかけとなることが期待された。

ポルトガルチームからは、「練習は公開とし、予約がなくとも見学は自由。特に次代を担う子どもたちや、指導者などのパラスポーツ関係者に是非見てほしい」という申出を頂いた。しかし、コロナ禍により安全・安心が最優先とされ、住民と直接触れ合う交流はできなくなり、予定していたイベントなども著しい制約を受けたことは残念であった(p.90参照)。

ポルトガルの事前キャンプでは、競技種目や障がいの特性が多岐にわたる選手団の受入れを経験した。この受入れを通じて、様々な障がいの特性に応じた対応やニーズを知ることができたことは、県立スポーツセンターの施設運営にとって大きな財産となった。県では、そうした経験や実績を生かし、同センターをパラスポーツをはじめとする総合的なスポーツの推進拠点として、(一社)神奈川県障がい者スポーツ協会や関係団体、市町村等と連携して、県民がパラスポーツを身近に楽しめる環境作りやスポーツイベント・合宿の受入れを積極的に推進することで、パラリンピックの機運を継承するとともに、共生社会の実現に向けて取り組んでいく。



①事前キャンプの協定締結式にも出席したポルトガルパラリンピック委員会のレイラ・マルケス・モッタ選手団長 ②ポッチャの混合ペア(BC4)に出場した選手たち ③ポルトガルパラリンピックチームから送られた動画を基に制作した選手団の紹介映像

●「かなチャンTV」での公開動画

ポルトガルパラリンピアン紹介動画(ショートver.)
ポルトガルパラリンピアン紹介動画(ロングver.)
ポッチャ カルラ・オリベイラ選手の紹介動画
ポッチャ アントニオ・マルケス選手とコーチ、ポッチャ競技の紹介動画
パラ陸上・走幅跳 エリカ・ゴメス選手の紹介動画
パラ陸上・マラソン ジョルジェ・ピナ選手と子どもたちとの対談動画
パラ陸上・マラソン マヌエル・メンデス選手、オデッテ・フィウザ選手、ジョルジェ・ピナ選手の紹介動画
パラ水泳 ダニエル・ヴィテイラ選手の紹介動画
パラ馬術 アナ・モタ・ヴェイガ選手の紹介動画
パラバドミントン ベアトリス・モンテイロ選手、ディオゴ・ダニエル選手の紹介動画
パラ水泳 スザーナ・ヴィエイラ選手、パラ陸上・砲丸投 ミゲル・モンテイロ選手、ポッチャ アンドレ・ラモス選手の紹介動画
東京2020大会まであと1年～ポルトガルパラリンピアンが熱く語る～ 東京2020大会まであと1年だった2019年当時の選手の心境を語ったインタビューなどが収められた動画